



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第104号

2020年3月3日

令和2年度年次総会概要決まる

江戸・東京の奥座敷で充実の2日間を

5/30・31に秩父神社(埼玉県)で



柞の森

今年の年次総会・研究発表会・シンポジウムを5月30日(土)に秩父神社で開催する。菌田稔理事長が宮司を務める秩父神社は、由緒を崇神天皇の時代に遡る関東屈指の古社でこの地方の総鎮守。社殿背後の柞(ははそ)の森は神社創建以前から現在地に存在し、神体山である武甲山を巽(南東)に遥拝する聖地とされている。

武甲山は日本武尊が威容を讃えたといわれ、兜に似ていることからこの名がついたとされている。大正期からセメントの材料としての石灰岩の採掘が盛んになり、山容が変わるほどの開発にさらされたが、1980年代には自然保護の観点から地元と企業とで協定を結び、採掘量の制限や植林が行われるようになった。

また、秩父は関東平野を豊かに潤してきた荒川の源流域でもあり、流域のコミュニティが連携した魅力ある地域づくりが始まっている。シンポジウムでは、こうした地域コミュニティの在り方や今後の展望について多面的に議論する。

翌日の見学会も含め、充実した2日間になるだろう。

5月30日(土):秩父神社

| | |
|-------------|--------------|
| 10:30~11:00 | 秩父神社正式参拝 |
| 11:00~11:45 | 年次総会 |
| 11:45~13:00 | 研究発表 |
| 13:00~14:00 | 昼食と秩父神社柞の森拝観 |
| 14:00~18:00 | シンポジウム |
| 14:00~15:00 | 基調講演 |
| 15:15~17:45 | パネルディスカッション |
| 17:45~18:30 | 懇親会 於:秩父神社 |

見学会は三峯神社をじっくりと

総会翌日の31日(日)の見学会では、標高1102mの三峰山頂に鎮座する三峯神社を訪れる。

三峯神社は登山途中で道に迷った日本武尊が山犬(狼)に導かれたという創建伝説を持ち、平安時代末から修験道の修行地とされてきた。この一帯の神社の眷属(神の使い)はいずれも狼で、三峯神社も境内には狛犬ではなく、狼の像が置かれている。20世紀の初頭に絶滅したとされるニホンオオカミではあるが、今でもその生存を信じ、この山で生きた姿を追い続ける人もいる。

帰路、今も採掘が続く武甲山、龍神の住み処として信仰を集める大ケヤキが威容を誇る秩父今宮神社に立ち寄り、2日間の日程を締めくくる。

5月31日(日) 見学会:三峯神社参拝と拝観

| | |
|-------------|-----------------------|
| 9:00 | 西武秩父駅集合 専用バスで三峯神社に |
| 10:30~15:30 | 三峯神社正式参拝・拝観 |
| 17:00~ | 武甲山経由で秩父今宮神社へ |
| 18:00 | 西武秩父駅解散 |



京都の伝統行事を支える森林資源利用

話題提供： 深町加津枝(京都大学大学院准教授)



京都府のHPを一部加工

緑に囲まれた京都 京都市は盆地で、東山と西山、北山からさらに北に続く森林に囲まれている。薪や柴など、日々の生活を支える資源が山から川でつながり、長く都の生活を支えてきた。ところが、燃料革命で薪炭が使われなくなり、蓮根や蓴菜などの食糧資源の採取も行われなくなった結果、森林と水辺との繋がりがなくなりつつある。こうした中で、松上げなど集落の中で行われる伝統行事を通して、どんな森林資源が使われているかをみていきたい。

都市のすぐ近くを緑が囲んでいるということが京都の特徴で、緑被率が高く、周囲の山が緑の骨格となっている。市としても市域を取り囲む三山と北へ続く山を景観保全の面からも大切な要素として、景観に配慮した美観地区に、また森林と盆地の接する地域を風致地区に指定するなど、自然と都市調和を維持する法令を定めている。さらに、盆地から山(森林)に広がる区域は世界遺産になっている。

国でも南丹市、綾部市、京丹波市の、山村としての暮らしが続く地域を、「1200年の都の生活文化を支えてきた地域」をテーマに、里山に守り継がれた川・森林を一体で国定公園に指定している。これは今までの生活を維持する仕組みで、森と関わる伝統文化と暮らしを対象とした珍しい例だ。強い規制をかけない6万9千ha近くに及ぶ大きな面積を持つ。ただ、こうした施策によって視覚的な美観を重視する余り、緑を伐ったり、変えたりすることは良くないという考えが広まり、生業、産業としての利用が少なくなっていることが指摘される。

火上げ(火祭り：後述)・粽・栃餅などは生活の中の歴史文化であり、茅葺で有名な美山は木材・炭・薪炭の供給地で、自然と文化が一体となった物流の起点だった。木を燃やす火祭りは火への感謝、循環の感謝、草木への信仰が形となったものであろう。材の確保のために持続的な森林資源の確保が必要だが、利用するのは燃やす材だけではなく、今では日常の中では使わなくなってしまった藤蓐など、結んだり繫いだりするものも森林資源の中から調達する。

三井物産は、社会貢献活動の一環として、こうした森林資源の確保のための育林を行っており、京都府、京都モデルフォレスト協会と「森林の利用保全に関する協定」を結び、「大文字五山送り火」の薪や護摩木用としてのアカマツ、「鞍馬の火祭」の松明用コバナミツバツツジを伐採、提供している。

ここでは五山の送り火(8/16 担い手(大文字)：46戸)、鞍馬の火祭(10/22 同：160戸)、広河原の松上げ(8/24 同：以前の住民を含む46戸)を例に、伝統行事での森林資源利用を見ていきたい。

五山の送り火 社寺による行事で、檀家・氏子が保存会を作って主催者となっていることが多い。ただ、保存会=檀家の場合と、保存会≠檀家で、NPOなど法人化している所もある。5つの地域でそれぞれ特徴的な祭りだが、ここでは「大文字」を取り上げる。

文字を形作るのはアカマツの根の油分を含んだ部分で、この他にコバナノミツバツツジは真っ直ぐの枝の先が枝分かれしていて松明を作ると燃えやすく、火の持ちも良いので、焚きつけの柴として使う。この他にフジやスギなどが必要とされている。

担い手としては浄土院の檀家と保存会員で維持されているが、後継者が少ないのが大きな問題。後継者をどう育てるか、地域民とどう関わるかが課題となっている。他の送り火でもNPO法人にするなど、一般市民が参加できる方策を探っている。

準備作業としては、まずマツの割り木を集めなければならない。薪となる木の元の大きさは一抱えほどで、倒すのはチェーンソーだが、割っていくのは斧で、薪ぐらいの大きさを束にして運ぶ。林内にはモノレールがあるが、基本は人力で、最近はおイスクウトを動員している。

マツの確保も困難になってきている。これまでは檀家の入会地から少しずつ賄ってきたが、薪炭林として恒常的に手入れをしていた頃とは違い、マツ枯れ被害や、鹿の食害など、山が荒れてきている。少しでも手を入れていくと森が更新できて若木が育つので、ヴォランティアと連携して山の手入れが行われている。北側の法然院のフィールドソサエティの森や国有林である銀閣寺の山など周辺の森はそれぞれ小規模で、ここからまとめて調達することは困難だ。その結果、入会地では足りないものは遠くから購入することになる。

2010年頃、入会地のマツがあと何年もつかを検証したところ、以後12年くらいは何とかできるという結論に達した。保存会でも10年くらいはとしているので妥当な数字だろう。では、入会地から材が取れなくなったらどうするのだろうか。遠隔地からの調達に頼ることになるのだが、最近はお伊豆や福井など市域・府域を超えることもある。拠点は入会地で、その他は業者に委託するというようになっていて、周辺になくとも金を払えば何とかできる。とは言え、綱渡りであることは否めない。

(続きは次号に)



玉川上水生き物調べ タヌキと花マップー

講師：高槻 成紀(麻布大学いのちの博物館上席学芸員・元東京大学教授)

以前から調査したいと考えていた地元、小平を流れる玉川上水のささやかな自然について、定年退職後に調べてみることにした。また、縁あって地元の市民と観察会をすることになった。ビギナーとの作業には大変さと楽しさがある。都市緑地とそこに暮らす動植物を調べるという点で接点が見いだせるかもしれない。

1. タヌキ調査 最初に取り組んだのは津田塾大学のタヌキ。現役時代に玉川上水と周辺の孤立林でセンサーカメラのタヌキの撮影率を比較したところ、玉川上水の方が撮影率が高かった。これは「緑地が狭くても連続していることが重要である」ことを示唆する。その「細長連続緑地」にまとまった緑地が隣接していればタヌキの生息確率が高いと予測して津田塾大学を選んだところ、確かに生息が確認された。

ここでため糞場を確認し、定期的に糞分析を行ったところ、関東地方の雑木林のタヌキとは違い、キイチゴ、ヤマグワ、ヒサカキなどの種子は少なく、ギンナンとカキノキ、ムクノキが多いなどの違いがあった。津田塾大学キャンパスはシラカシが多く、雑木林に多い低木類は少ない。100年前の大学移転の際に砂埃を防ぐためにシラカシを植林したためであることがわかった。

タヌキが糞をすれば糞虫が集まる。私は糞虫はシカなどがある特殊な場所にいるもの、市街地にいるとは思っていなかったので、トラップ調査をして多数のコブマルエンマコガネが採集されたことに驚いた。ただしセンチコガネなどはごく少数しか採集されなかった。さらに驚いたのは、糞虫がいるのは玉川上水周辺だけではなく、市街地にある狭い公園などにもいたことである。

また、ため糞場にはムクノキ、エノキ、カキノキ、イチョウなどの実生が多数見られた。

こうしたことから、タヌキがいることの意義を他の動植物との繋がりで確認する調査をしている。またタヌキの動きに興味を持った市民の希望に応じて、プラスチックマーカーを利用した調査をした。食べ物のソーセージの中に色付ダイモテープを仕込み、場所ごとに色を変えて食べさせたところ、幾つかのため糞場ごとに回収されたテープの色から、タヌキ

の動きを推定することができた。

2. 訪花昆虫調査 観察会をしながら、一人ではできないことをしてみたいと考え、訪花昆虫調査をすることにした。参加者一人一人に、花の前に立って訪花昆虫を記録してもらった。その場ではわからないが、そのデータをまとめると、皿形の花には双翅目が多く、筒型の花には膜翅目と鱗翅目が多く吸蜜に来ることが示された。このことは参加者に驚きをもって受け入れられた。それは「さまざまな花に、さまざまな昆虫がいわば気ままに訪れていると思っていたが、そうではなかったこと」、「特別な訓練を受けなくても、特殊な道具類を使わなくても、こういうデータが取れたこと」、「ある意図を持って調べ、まとめれば、思いがけないことを示すことができること」などについての驚きであった。

3. 花マップ作り 玉川上水の活動は小平周辺で行なっているが、玉川上水30kmをカバーしたいと思い、数人に声をかけて全域を毎月歩くことにした。毎月「今月の花」を決め、ほぼ100の橋を利用して区画とし、その区画に「今月の花」が咲いていることを確認したら、撮影して証拠を残すようにした。その中間経過を報告するシンポジウムを行ったら参加者が増えた。これを2年余り行った結果、春夏秋冬の冊子を作ることができた。

この冊子には見開きページに2種の野草を取り上げ、左ページに写真を使った解説をのせた。解説にはその野草の特徴や類似種との区別点などを、玉川上水で見られることを主体に書くようにした。また右ページには玉川上水での分布マップを示すとともに、スケッチとメンバーのエッセイをのせた。こうしてオリジナリティーに溢れる冊子を作ることができた。この冊子作りには、メンバーにデザイナーがいたので専門的なアドバイスをもらうことができた。また助成金の事務処理に慣れたメンバーもいて順調に進めることができた。このように、メンバーの個性を活かすことができたのもよい経験であった。

現在はその展開型として「花ごよみ」を行っている。これらの活動は「都会の自然の話を聴く-玉川上水のタヌキと動植物のつながり」に記述した。

(文責 渡邊節子)

次回予告【第86回関東定例研究会】

- ◆日 時：4月20日(土) 14:00~16:30
- ◆場 所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念2号館1階 2104教室
(東京都渋谷区東4-10-28)
- ◆テマ：森里川海からはじめる地域づくりー「地域循環共生圏」の創造に向けてー
- ◆講師：中井 徳太郎(環境省総合環境政策統括官)

book book book book book book

熱帯熱帯の森から 森林研究フィールドノート

渡辺 弘之著

60年以上にわたり内外、特に東南アジアで重ねてきた森林調査の中で印象に残ったことを一般の読者を念頭に、平易な、そして時にユーモアがこぼれ落ちる文章をまとめた一冊。

土壌動物が森林の生態系に与える影響をテーマに始まった著者の研究生活だが、ある時はアフリカでバオバブを味わい、ある時はタイでサルの大学の授業参観をし。その探究心と好奇心はとどまる所を知らない。とは言えこれはあくまでも森林調査の一コマなのであり、著者が共に森に入り指導した学生が、今ではそれぞれに優れた業績を上げる研究者に育っていることを考えると、これらが研究の合間の「閑話休題」であることに間違いはない。中には既に姿を消したかもしれない森の営みもあるかもしれない。環境破壊が危機的状況にあるともいわれる昨今、一読をお勧めする。

(あっぷる出版社 定価2千2百円+税)

進士五十八の風景美学

進士 五十八著

2016年から福井県立大学学長を務める著者が、曹洞宗大本山永平寺の機関紙『笠松』に連載した記事を一冊にまとめたもの。ライフワークとしてきた「ランドスケープ・アーキテクツの思想と方法」を一般の読者に理解してもらうことを目指して、「美しい風景の地域創造のための10の基本的視点」を「両極の一般概念を対比させながら本来の在り方を考える」ことで、対極の中間にある選択肢に発想の広がりを求めることができるという構成になっている。

永平寺の機関紙掲載であるだけに福井愛に満ち溢れているのではあるが、核となる思いは日本のみならず世界中で、それぞれの「地域らしさ」を考えるための重要なヒントとなるであろう。

(マルモ出版 定価7百円+税)

事務局から

- 他人事だと思っていたパンデミックがそぞろ身近に迫ってきたような日々が続いております。会員の皆さま方にはお元気にお過ごしでしょうか。くれぐれもご用心いただき、予防専一で過ごさせていただきますよう、お願いいたします。
- 年次総会は別記の通り、理事長のおひざ元、秩父神社で開催いたします。秩父は荒川を通じ、またセメントの供給地として江戸・東京の繁栄を支えてきた地域でもあります。シンポジウムではこうした地域コミュニティについて考えて参ります。ぜひご参加ください。研究発表も募集中です。こちらも奮ってご応募ください。
なお、前号にて見学会では秩父三社巡拝といたしました。移動時間の都合上、三峯神社のみといたします。悪しからずご了承ください。
- 会誌『社叢学研究』第18号を同封いたしました。今号も力作ぞろいです。「活動報告」や「社叢訪問記」など、会員の皆さま方のページも充実してまいりました。ぜひ、ご投稿ください。

編集後記

あれよあれよという間に困ったことに！ 様々な会合がキャンセルになり。って、まさか5月までは続かないよね？ ウィルスは気温が上がって湿度が増えると減るっていうから。。。

京都は、あれだけ中国からの観光客が多いのだから(今や錦通りなんて午後からでもふつ～に歩けるくらいの寂しさ。。。)もっとたくさんいても、いや、大阪だってミナミの繁華街なんて日本語が通じないくらいの勢いだったのだから、と思うのだけれど、まさかの湯浅町？！

ともあれ、一刻も早く収まることを願ってやみません！ テレワークでゆうても(時差出勤はもともとそうだし)、それではアカンことをするために出勤してるのよ。ま、いざとなったら事務局封鎖するんやけどね。(藤岡 郁)

研究発表者募集！

テーマ：社叢に関する理論的研究や社叢の保存・拡充に関する実践的調査研究

※ いずれも未発表のものに限る

発表時間：20分(報告15分+討議5分)

応募締切：2020年3月末日必着

応募要領：住所・氏名を明記の上、発表内容を300～400字にまとめ、E-Mail、FAX、郵便で本部事務局に送付

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号

TEL・FAX 075-212-2973

URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp

社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内

TEL080-1514-5032 E-Mail shasougakkai@hotmail.com